

愛知県東海市

きたひろ  
北広遺跡範囲確認調査報告

2016年

愛知県東海市教育委員会



愛知県東海市

きたひろ  
北広遺跡範囲確認調査報告

2016年

愛知県東海市教育委員会



## 序

愛知県東海市は、知多半島の付け根、伊勢湾の東岸に面しています。

この地は、はるか古代から交通の結節点として意識されており、古くは日本書紀に記載があるヤマトタケル伝説の地として知られ、現在は伊勢湾岸道が通り、交通・物流の拠点として発展してきました。

近年、本市では名古屋鉄道太田川駅周辺をはじめとして、様々な開発が進められています。かつてわが国が高度経済成長を遂げていた頃の規模とは違うものの、本市の姿が変わりつつあります。

今回、報告する北広遺跡周辺は、これまで農地として利用されてきましたが、今後土地改良事業が計画されています。これまでは遺跡の範囲が不明瞭なままでありましたが、今回の調査によって遺跡の範囲が明確となり、埋蔵文化財の保護に資する情報が得られたと考えております。

なお、調査に際しては、地元の皆様ならびに関係者、関係諸機関より多大なる御理解、御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

平成28年3月

愛知県東海市教育委員会  
教育長 加藤朝夫

## 例 言

- 1 本書は愛知県東海市富木島町に所在する北広（きたひろ）遺跡の範囲確認調査報告書である。
- 2 本調査は、文化庁より平成27年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（事業名称：東海市市内遺跡発掘調査等）の交付を受けて実施したものである。
- 3 本調査は、北広遺跡の詳細な範囲確認を目的として、東海市教育委員会が実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査主体	東海市教育委員会		
調査事務局	東海市教育委員会社会教育課		
調査担当	東海市教育委員会社会教育課	統括主任	永井伸明（調整）
	同上	主任	宮澤浩司（現地調査・整理作業）
調査支援	国際文化財株式会社 中部支店		

- 4 本事業は、現地での発掘調査を平成27年9月11日から10月21日まで実施し、一次整理作業以降の作業については国際文化財株式会社中部調査室清須事務所において実施し、本書の刊行をもって終了した。
- 5 現地調査は宮澤が担当し、国際文化財株式会社中部調査室主任技師上田誠人（管理技師・測量士）、主任調査員坂野俊哉（調査補助員）の調査支援を受けて実施した。  
調査に際しては土地所有者である久野保彰氏、神野鯨一氏、神野一美氏、牧田清次氏の御協力無くしては調査を実施し得なかった。ここに記して感謝申し上げます次第である。
- 6 調査の実施にあたって、愛知県教育委員会、東海市環境経済部農務課等、関係各位の御協力を賜った。
- 7 本書の編集・執筆は宮澤が行った。整理作業及び図版作成については国際文化財株式会社中部支店の支援を受けた。
- 8 調査及び報告書作成にあたっては、小栗康寛氏（とこなめ陶の森資料館学芸員）、中野晴久氏（愛知学院大学講師）の各氏に御指導・御協力を賜った。ここに記して御礼申し上げます次第である。
- 9 現地調査は櫻井敬、上村美久らの尽力によりなし得たものである。
- 10 出土遺物の実測・採拓及びデジタルトレースは小栗康寛氏（とこなめ陶の森資料館）、加藤豊子氏、花井晶子の協力を得た。
- 11 出土遺物の写真撮影は上田が行った。
- 12 今回の調査の出土遺物、作成した図面及び写真等の記録・資料は全て東海市教育委員会において保管している。

## 凡 例

- 1 本書で使用した座標は、国土交通省告示に定められた国土座標である、平面直角座標第七系に準拠し、世界測地系にて表記している。方位は座標北を示す。標高は東京湾平均海面高度（T.P.）を使用した。
- 2 遺構の種別番号は『発掘調査のてびき』文化庁文化財部記念物課編 2010 に従った。以下にその主なものを示す。  
SK= 土坑 SP= 柱穴・ピット SD= 溝 SB= 建物 SX = その他不明遺構
- 3 土層の土色については『新版標準土色帖』（2007 年版）農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。
- 4 遺構図や遺物実測図の縮尺は、個々の図に表示してある。
- 5 参考文献目録は巻末に一括して掲載した。

# 目 次

序

例言・凡例

## 第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯と経過……………1

## 第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的・歴史的環境……………2

## 第3章 調査の方法と成果

第1節 発掘調査の方法と基本層序……………5

第2節 調査経過……………6

第3節 1トレンチの調査……………8

第4節 2トレンチの調査……………10

第5節 3トレンチの調査……………12

第6節 4トレンチの調査……………14

第7節 5トレンチの調査……………16

第8節 6トレンチの調査……………18

第9節 7トレンチの調査……………20

第10節 8トレンチの調査……………22

第11節 9トレンチの調査……………24

第12節 10トレンチの調査……………26

## 第4章 総括

第1節 北広遺跡の範囲について……………28

第2節 まとめ……………30



## 挿 図 目 次

第1図	北広遺跡の位置	1	第12図	6トレンチ出土遺物	18
第2図	周辺の遺跡と地形	2	第13図	6トレンチ平面図・断面図	19
第3図	周辺主要遺跡分布図	3	第14図	7トレンチ出土遺物	20
第4図	トレンチ配置図	5	第15図	7トレンチ平面図・断面図	21
第5図	1トレンチ出土遺物	8	第16図	8トレンチ平面図・断面図	23
第6図	1トレンチ平面図・断面図	9	第17図	9トレンチ出土遺物	24
第7図	2トレンチ平面図・断面図	11	第18図	9トレンチ平面図・断面図	25
第8図	3トレンチ平面図・断面図	13	第19図	10トレンチ出土遺物	26
第9図	4トレンチ出土遺物	14	第20図	10トレンチ平面図・断面図	27
第10図	4トレンチ平面図・断面図	15	第21図	北広遺跡想定範囲 (S=1/2000)	29
第11図	5トレンチ平面図・断面図	17			

## 写 真 目 次

写真1	基本層序 (1トレンチ)	6	写真2	作業写真	7
-----	--------------	---	-----	------	---

## 写真図版目次

写真図版第1	調査地遠景 (西から) 1トレンチ全景 1トレンチ柱穴・土坑	写真図版第7	9トレンチ柱穴列 10トレンチ全景 10トレンチ01SK・02SK・03SK
写真図版第2	1トレンチ遺物出土状況 2トレンチ全景 2トレンチ01SK	写真図版第8	1トレンチ出土遺物 1 1トレンチ出土遺物 2 1トレンチ出土遺物 3
写真図版第3	3トレンチ全景 4トレンチ全景 5トレンチ全景	写真図版第9	1トレンチ出土遺物 4 4トレンチ出土遺物 5 4トレンチ出土遺物 6
写真図版第4	5トレンチ02SD・03SD 6トレンチ全景 7トレンチ全景	写真図版第10	4トレンチ出土遺物 7 4トレンチ出土遺物 8 4トレンチ出土遺物 9
写真図版第5	7トレンチ06SP・07SP・08SP 8トレンチ全景 8トレンチ04SD	写真図版第11	6トレンチ出土遺物 10 7トレンチ出土遺物 11 表採資料 12
写真図版第6	8トレンチ落ち込み 9トレンチ全景 9トレンチ04SP・05SP・06SP・ 07SK	写真図版第12	9トレンチ出土遺物 13 9トレンチ出土遺物 14 10トレンチ出土遺物 15



## 第1章 調査の経緯

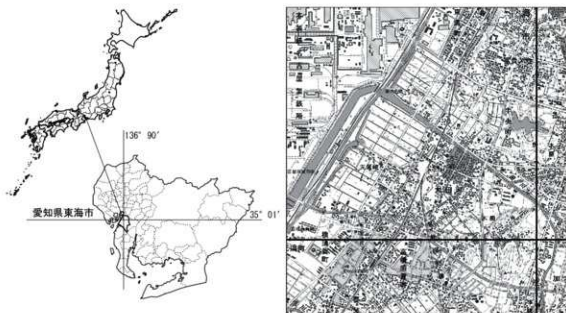
### 第1節 調査に至る経緯と経過

北広遺跡は愛知県東海市富木島町北広、東広地内に位置する（第1図）。平成11年に刊行された『知多半島詳細遺跡分布調査報告書』によると、遺跡の時期は中世の遺物散布地であり、分布調査の際に山茶碗や甕、鉢が採集されている。遺跡の現況は畑地であり、丘陵上の畑に遺物が広く散布しているとの記載がある。

東海市では、北広遺跡を含む木田地区北部において、土地改良事業の計画が挙がってきており、事業計画区域内に北広遺跡が所在することから、今後の遺跡の取り扱いについて検討する上で、遺跡の性格とその範囲が課題となった。このため平成26年3月に現地踏査を行い、遺物の散布状況の把握につとめたが、山茶碗の小片を中心とした遺物の散布状況は散漫であり、現地踏査のみでは遺跡の範囲は不明瞭な状況であった。その後、土地改良事業の担当課である環境経済部農務課と調整を進めた結果、遺跡の範囲及び遺跡の残存状況等について、範囲確認調査を実施して確認することとなった。このため、平成27年度に文化庁より平成27年度国宝重要文化財等保存整備費補助金（事業名称：東海市市内遺跡発掘調査等）の交付を受けて北広遺跡範囲確認調査を実施するに至った。

調査に際しては、現地調査及び整理作業について、平成27年8月25日に国際文化財株式会社中部支店と調査支援業務委託契約を締結し、調査支援を受けた。

現地調査は9月11日から開始し、土地改良事業予定区域内に10箇所のトレンチを設定した。各トレンチは、2→3→1→4→8→7→10→9→6→5の順に調査し、10月21日に現地調査を終了した。その後、国際文化財株式会社中部調査室の清須事務所において整理作業を実施し、本報告書の刊行に至ったものである。



第1図 北広遺跡の位置

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

北広遺跡は、知多半島北部に位置する東海市富木島町の丘陵上に位置している。知多半島は地理的特徴として、半島の中央部、南北方向に丘陵が位置し、東西方向の臨海部には段丘や沖積平野が広がっている。北広遺跡が所在する丘陵は、大田川によって開析された谷状の地形によって丘陵が南北に切り離された、南から延びる舌状の丘陵である。地元では、丘陵上に展開する木田地区から、この丘陵にかけてを木田の丘陵と呼んでいる。この木田の丘陵の地質は、粘土と砂の互層を中心として構成される、いわゆる常滑層群からなり、第三紀中新世～鮮新世に形成されたとされる。

北広遺跡は木田の丘陵の東側に位置し、大田川に向かう東向きの緩斜面上にあたる。また、大田川によって開析された谷から海岸にかけては、知多半島でも有数の広さを持つ海岸平地であり、平地上には砂堆と呼ばれる浜堤状の砂の高まりが、南北に延びて形成されている。砂堆とは本市における海岸平地の形成を考える上で重要な地形的要因である。大田の海岸平地に砂堆が形成されたのは、砂堆上に展開する遺跡の調査成果等から、縄文時代後期頃であるとみられ、最も内陸側の砂堆から海側の砂堆にかけて順次形成されていったと考えられている。

この砂堆の形成には、伊勢湾の地形とそこに流入する河川が深く関わっていると考えられている。

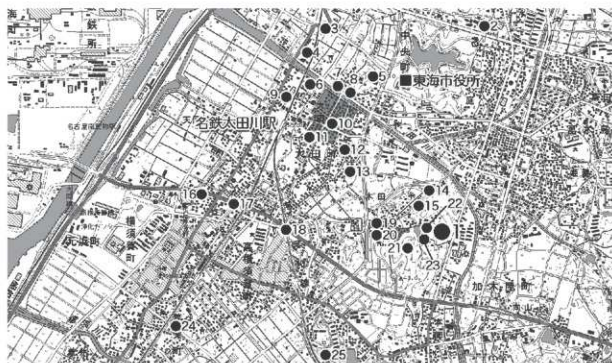


第2図 周辺の遺跡と地形

縄文海進によって現在の海水面よりもはるかに上昇していた縄文時代の海岸線は、地球規模の寒冷化によって、次第に現在の海水面に近づいていった。海水準の低下により、海岸平地には伊勢湾に流入する木曾川や庄内川といった河川から供給される砂が、湾内の海流によって吹き寄せられるように堆積し、砂層となって陸地化していくことで形成されたのが砂堆である。こうして形成された砂堆は海岸線に沿って細長く伸び、砂の堆積が進むことで複数条形成された。大田の海岸平地では3条の砂堆が確認できる。

この大田地区に先人達の生活の跡が見られるようになるのは、縄文時代前期からである。木田の丘陵中腹の北側斜面に所在する高ノ御前遺跡は、市内で最古の縄文土器が出土した遺跡であり、縄文前期以降、縄文晩期に至るまでの長期にわたって存続した遺跡であることが分かっている（第3図14）。住居址等の遺構は確認されていないものの、市内の数少ない縄文時代の遺跡であり、大田の海岸平地に砂堆が形成される以前の海岸を臨む場所に位置している。

その後、砂堆の形成にとまなう海岸平地の陸地化によって、海岸平地上に遺跡が展開していく。畑間遺跡及び東畑遺跡は、その海岸平地上の砂堆に展開した、弥生時代から近世に至るまでの大規模な集落遺跡である（第3図12・13）。同遺跡は土地区画整理事業にとまなう発掘調査が実施されており、弥生中期後葉を中心とした時期と古墳時代前期を中心とした時期の遺構を数多く確認している。その後は同じ砂堆上に連続と集落が営まれているが、中世以降大規模な開発があったようで、砂堆上を含めた広範囲に生活の痕跡が残されている。また、木田の丘陵上には、中世城館である木田城が築かれ、戦国期までは在郷の豪族である荒尾氏の支配下にあった（第3図20）。また、



- |            |            |           |              |           |
|------------|------------|-----------|--------------|-----------|
| 1 北広遺跡     | 6 後田遺跡     | 11 龍雲院遺跡  | 16 横須賀御殿跡    | 21 山畑遺跡   |
| 2 丸根古墳（消失） | 7 神宮前遺跡    | 12 畑間遺跡   | 17 烏帽子遺跡     | 22 西広1号遺跡 |
| 3 松崎遺跡     | 8 王塚古墳（消失） | 13 東畑遺跡   | 18 太田川第3路切貝塚 | 23 西広2号遺跡 |
| 4 上浜田遺跡    | 9 下浜田遺跡    | 14 高ノ御前遺跡 | 19 木田遺跡      | 24 大木之本遺跡 |
| 5 弥勒寺遺跡    | 10 郷中遺跡    | 15 前畑遺跡   | 20 木田城跡      | 25 岩屋口古墳  |

第3図 周辺主要遺跡分布図

木田の丘陵と尾根でつながった小丘陵上には古刹である雨尾山観福寺（天台宗）が存在している。

今回報告する北広遺跡周辺は、高ノ御前遺跡が存在する木田の丘陵の東側斜面にあたる。北西側には高ノ御前遺跡に続く丘陵の稜線上に前畑遺跡（第3図15、縄文～弥生・中世）が存在し、丘陵頂部には木田遺跡（第3図19、弥生・中世・滅失）や山畑遺跡（第3図21、中世～近世）が存在する。北広遺跡は高ノ御前遺跡から位置する舌状地形とは緩やかな谷を挟んだ別の小丘陵に位置している（第3図1）。この丘陵頂部には西広1号遺跡（第3図22、時期不明）、西広2号遺跡（第3図23、中世）が存在する。

なお、中世以降、近代に至るまで北広遺跡周辺は大きな地形変化は加えられていないようである。ただし、戦後に入ると柑橘類の栽培のために開墾され、現在見られる段々畑状の地形が形成されている。

## 第3章 調査の方法と成果

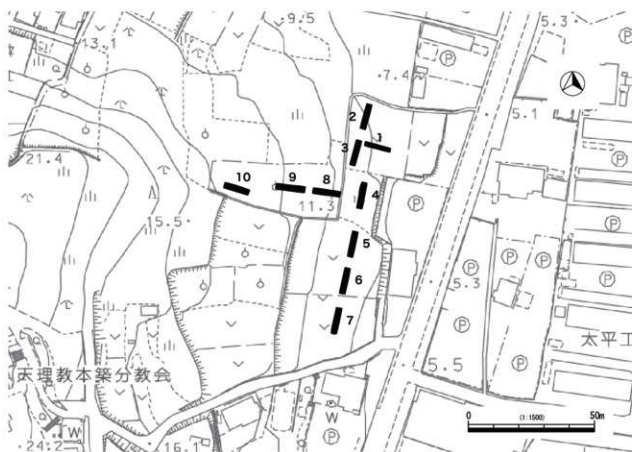
### 第1節 発掘調査の方法と基本層序

今回の発掘調査は、遺跡の詳細確認調査であることから、遺跡の範囲の広がり及びその性格を把握することを目的として10箇所のトレンチを設定した。トレンチの設定については、地形及び過去の分布調査において想定される遺跡の範囲を勘案の上、任意に設定した。トレンチの規模は2m×10mを基本とし、立ち木等現地の状況に応じて規模を変更した(第4図)。

実際の発掘調査は、調査区内に繁茂する高さ1m程の下草を動力除草機で刈った後、調査区を設定し、重機を用いて表土及び攪乱土を除去した後に、人力にて、包含層掘削、遺構検出、遺構掘削を行った。

重要遺物や特定の遺物については地点上げ遺物として取り扱い、d-01から番号を付与し、出土地点をトータルステーションによって測量・記録した後に取り上げた。調査区断面図は各トレンチの長辺を基本として作成し、必要に応じてトレンチ短辺についても作成した。

調査終了後は重機を用いて埋め戻し作業を行ったが、比較的多くの遺構を確認した1トレンチ及び9トレンチについては、再調査時の遺構検出を考慮し、山砂にて表面を覆った上で、掘削土による埋め戻し作業を行った。



第4図 トレンチ配置図



写真1 基本層序 (1トレンチ)

写真1に1トレンチにおける基本層序を示す。表土は20cm程の厚さで堆積しており、耕作土である。表土下は粘質の強い褐色土からなり、遺物包含層である。遺物包含層は30cm程であり、表土下50cmで地山に達する。地山は赤味がかった褐色であり、強固に締まった粘土層である。透水性はほぼない。

## 第2節 調査経過

〔調査日誌抄〕 ※以下トレンチはTrと略称

- 9.11 調査開始。機材搬入と並行して草刈作業を実施した。
- 9.14 調査区設定のための草刈作業を継続して実施。
- 9.15 草刈作業を継続して実施。重機搬入、ネットフェンスの設置を行う。
- 9.16 ネットフェンスの設置を継続して実施。トレンチ設定作業を行う。草刈作業を継続して実施。
- 9.18 基準点測量及び水準測量作業実施。トレンチ設定の確認を行う。
- 9.24 2・3Trの表土掘削作業実施。2Trの遺構検出作業を実施。
- 9.28 2Tr土層注記、測量作業を実施し、埋め戻し。3Tr測量作業後、埋め戻し。1Tr表土掘削作業。
- 9.29 1Trサブトレンチ設定・掘削、遺構検出を行う。4Tr表土掘削作業。
- 9.30 1Tr遺構掘削、測量作業を実施。4Tr清掃、遺構検出、遺構掘削を行う。8Tr表土掘削作業。8Trは地形確認のため、1m東へ延長した。
- 10.1 1Trを写真撮影し、埋め戻し。4Tr遺構検出を行う。
- 10.2 4Trは降雨の排水作業と並行して遺物測量を実施。8Tr遺構検出、遺構掘削を行う。
- 10.5 4Trは前日に引き続き排水作業を実施。7Tr表土掘削作業。8Tr遺構掘削、測量を行う。10Tr表土掘削、清掃、遺構検出、遺構掘削、測量作業を実施。
- 10.6 4Tr遺構掘削、測量作業を行う。7Tr表土掘削作業。8Tr埋め戻しを行う。10Tr遺構検出、遺構掘削を実施。
- 10.7 4Tr土層注記後、埋め戻しを実施。6Tr表土掘削作業。7Tr清掃、検出作業を実施。サブトレンチの設定・掘削を行う。10Trの遺構検出、遺構掘削、土層注記、測量を行う。





- 10.8 5Tr表土掘削作業。6Tr包含層掘削、遺構掘削作業を行う。7Tr遺構掘削後、遺構写真撮影を行い、測量を実施。
- 10.9 5Tr表土掘削作業後遺構検出作業を実施。6Trサブトレンチ掘削、遺構掘削後写真撮影を実施。7Trの埋め戻しを行った。
- 10.13 5Tr清掃作業、遺構検出、遺構掘削後、写真撮影を行い測量を実施。6Tr測量作業後埋め戻しを行った。10Trの埋め戻しを行った。
- 10.14 5Tr埋め戻し作業を実施。9Tr表土掘削後清掃を行い、遺構検出、遺構掘削を行った。10Trの埋め戻しを実施。
- 10.15 9Tr遺構再検出し、遺構掘削を行う。写真撮影後測量を実施。
- 10.16 9Tr埋め戻し作業を実施。ネットフェンスの撤去を行う。
- 10.19 現場撤収作業を実施。
- 10.21 現場撤収作業を実施。現地調査終了



写真2 作業写真

## 第3節 1 トレンチの調査

## 概要

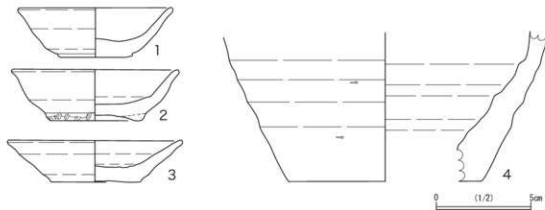
北広遺跡の東端を把握することを目的として設定した調査区である。当初は2 m幅での調査を予定していたが、果樹があったため、1.5 m幅に変更して調査を実施した。1.5 m×10 mのトレンチで、調査面積は15.29㎡である。調査前の表土には山茶碗の小片等の中世遺物の散布が認められた。また、1 トレンチのさらに東側の畑地では多くの中世遺物が散布していることから、中世遺構の存在が想定された。

掘削の結果、表土下に厚さ20cm～30cm程の遺物包含層とみられる粘質の強い褐色土の堆積がみられた。中世以前の耕作土と思われるが、事前の予想に反して遺物の包含はほとんど認められなかった。地山に近くなるにつれ、山皿を中心とした遺物が出土している。地山は東側に向かって緩やかに傾斜しており、トレンチ東西端の地山上での比高差は0.7 mである。ただし、トレンチ西半部において傾斜変換点があり、やや地山が立ち上がる。その後は緩斜面となる状況を確認した。

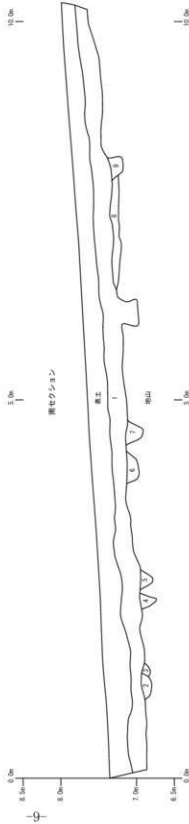
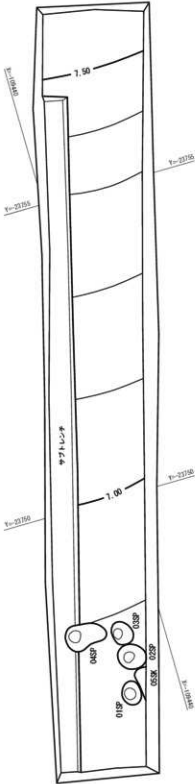
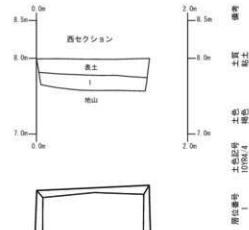
## 遺構・遺物

トレンチ東側にて複数のピットを検出した。ピット埋土からは山茶碗及び山皿が出土しており、埋土中や周辺の掘削土中に焼土塊や炭化物が含まれていた。これらの状況を勘案するとこれらピット群は柱穴の可能性が高い。

出土遺物はピット群を中心とする範囲から集中して出土した。全て中世段階の遺物であり、器種は山茶碗、山皿、広口瓶等であるが、出土量は少量である。第5図-1～3は山皿である。1は尾張編年第3～4型式にあたり、2は同第4型式、3は同第5型式にあたる。4は広口瓶の底部の可能性があり。時期は12世紀代か。



第5図 1 トレンチ出土遺物



層号	土質	土色	土記号	層号	土質	土色	土記号
1	粘土	黄褐色	10765/6	1	粘土	黄褐色	10765/6
2	粘土	黄褐色	10764/3	2	粘土	黄褐色	10764/3
3	粘土	黄褐色	10764/2	3	粘土	黄褐色	10764/2
4	粘土	黄褐色	10764/1	4	粘土	黄褐色	10764/1
5	粘土	黄褐色	10764/6	5	粘土	黄褐色	10764/6
6	粘土	黄褐色	10764/4	6	粘土	黄褐色	10764/4
7	粘土	黄褐色	10764/5	7	粘土	黄褐色	10764/5
8	粘土	黄褐色	10764/7	8	粘土	黄褐色	10764/7
	粘土	黄褐色	10764/8		粘土	黄褐色	10764/8

第6図 1 トレンヂヤ平面図・断面図

## 第4節 2トレンチの調査

### 概要

1トレンチの北西側、斜面に直交する形で設定したトレンチである。遺跡の北側の広がりを確認することを目的として設定した。2m×10mのトレンチで、調査面積は20.42㎡である。調査前は畑地であるが、果樹等は植えられておらず、北東側へ緩やかに傾斜した地形である。遺物の散布はごく僅かであった。

表土は薄く、30cm程であり、遺物包含層は認められない。表土下は、地山である赤味がかかった褐色粘土層が露出する状況であった。かつて地山まで大きく削平された様子が看取できる。これは、掘削前に確認していた2トレンチ西側、すなわち斜面の上側に存在する高さ60cm程の段を成す地形から、地形改変を受けていることが予想されており、これを裏付ける結果となった。

### 遺構・遺物

確認した遺構としては、調査区南東側壁面に食い込む形で土坑を確認している。直径0.6m程の円形を呈し、半分は調査区外に広がるようである。埋土中には焼土塊や炭化物が認められた。柱穴の可能性もある。出土遺物については、遺物包含層が大きく削平されていることから、時期比定が可能な遺物も含め、ほぼ出土していない。



### 第5節 3トレンチの調査

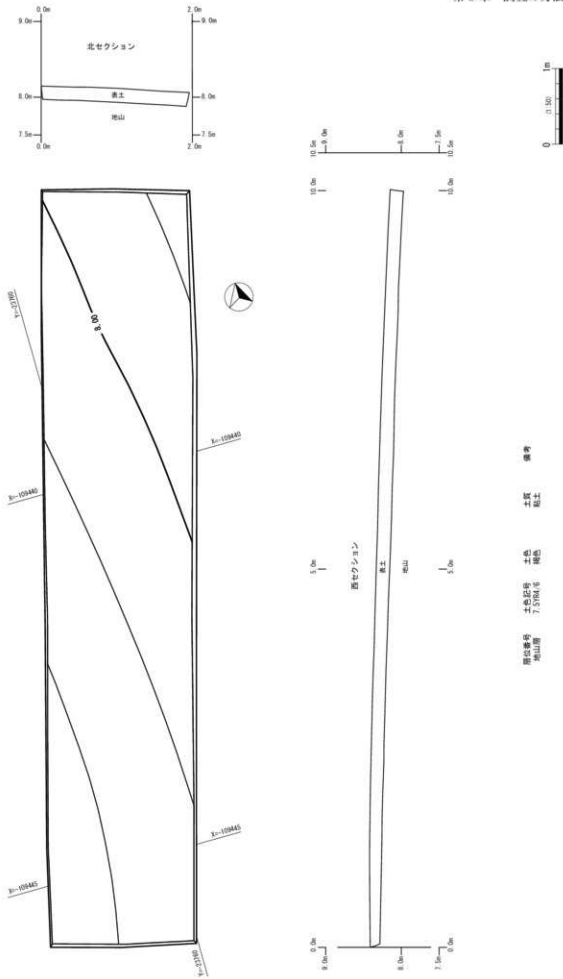
#### 概 要

2トレンチから5m程間隔をあけて設定したトレンチである。2m×10mのトレンチで、調査面積は20.06㎡である。トレンチ北東端は1トレンチと1.5m程の間隔がある。調査前は2トレンチと同じ区画の畑地であり、果樹等は植えられておらず、北東側へ緩やかに傾斜した地形である。

調査の結果、2トレンチ以上に地形改変が加えられていることが判明した。20cm程の表土（耕作土）の下層はすぐ地山であり、遺物包含層は全く残存していない。地山層まで削平する地形改変が加えられていたと考えられる。

#### 遺構・遺物

遺構・遺物共になし。



## 第6節 4 トレンチの調査

## 概 要

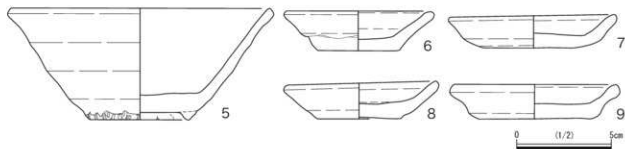
3 トレンチと約 5m の間隔をあけて設定した、2 m × 10 m のトレンチである。調査面積は 21.8m<sup>2</sup>。2・3 トレンチの現況地盤とは 30cm 程の比高差がある。南北方向にかけてはほぼ平坦であるが、東側へ緩やかに傾斜している。畑地ではあるが、調査着手時には多くの灌木根及び廃棄物のため、重機による表土剥ぎに難渋した。

調査の結果、表土は 30cm 程であり、トレンチ北側では表土直下で地山層を確認した。遺物包含層は削平を受けているとみられる。トレンチ南側は様相が異なり、地山が落ち込む状況を確認した。地山が落ち込んだ部分では複数のピットを確認している。落ち込みの埋土及びピット埋土からは山茶碗等が出土していることから、何らかの遺構であるとみられる。

## 遺構・遺物

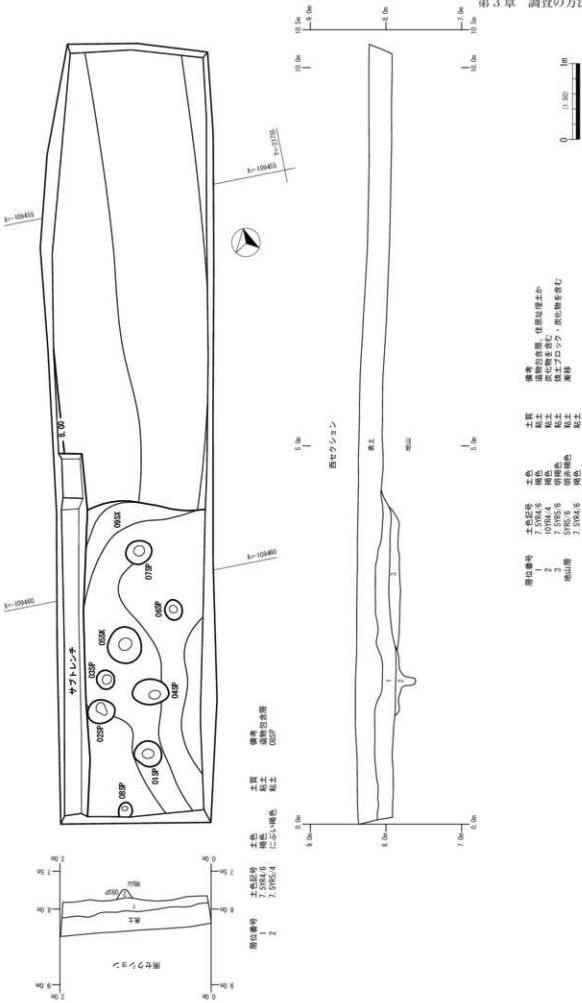
トレンチ南側で確認した地山の落ち込みは前述のとおり遺構の可能性が高い。落ち込み内にピットが集中していることを鑑みると、住居址である可能性が考えられる。

出土遺物は山茶碗及び山皿がある。第 9 図-5 の山茶碗は尾張編年第 7 型式にあたる。6～8 は山皿である。6 は尾張編年第 5 型式、7、8 は同第 6 型式、9 は同第 7 型式にあたる。出土遺物に時期幅はあるものの、おおむね 13 世紀代に取まると言える。出土遺物が少量であるため、遺構の時期比定は困難であるが、出土遺物の大半は住居址内から出土しており、遺構の埋没時期は 13 世紀末～14 世紀初頭と考えられる。



第9図 4 トレンチ出土遺物





第10図 4トレンチ平面図・断面図

## 第7節 5 トレンチの調査

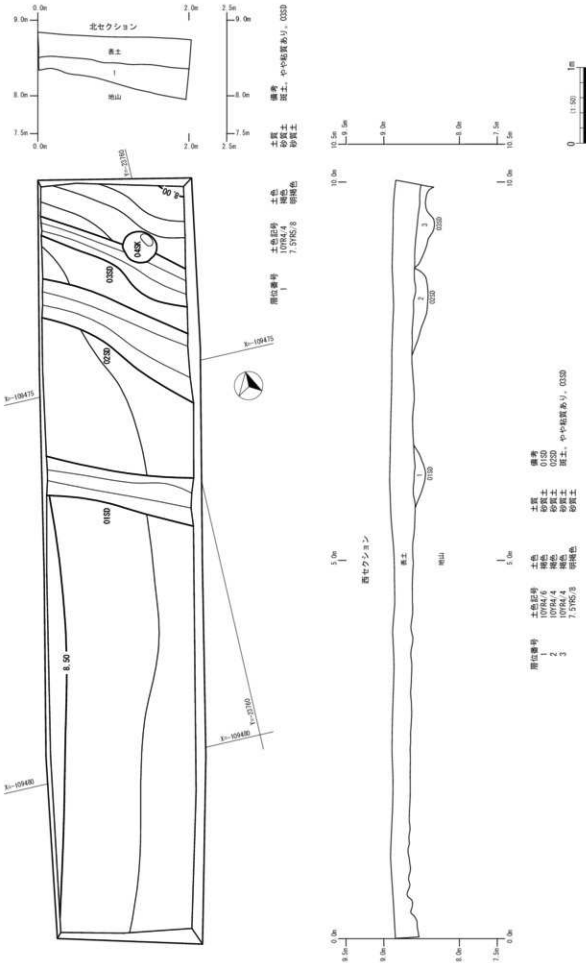
### 概 要

4 トレンチの南側、約 10 m 間隔をあけて設定した 2 m × 10 m のトレンチである。両トレンチ間に土地境界があることから比高差があり、現況地盤で 50cm 程、5 トレンチの方が高い。調査面積は 21.0㎡である。現況は 4 トレンチ同様、畑地として整備されており、南北方向にかけては平坦地形であるが、東西方向にかけては東へ傾斜する緩斜面である。

調査の結果、表土は 30cm 程の厚さで堆積しており、現在の耕作土とみられる。ただし、地山由来とみられる客土を含む状況であった。表土下はすぐ地山であり、遺物包含層はほぼみられなかった。

### 遺構・遺物

トレンチ北壁付近以外では遺構を確認していない。東西方向に平行して延びる 2 条の溝状遺構を確認している。残存している断面形状は皿状であり、20cm 程の深さを呈する。埋土中からごく少量の中世遺物が出土しているものの、詳細な時期の比定は困難であった。両遺構の性格は、2 条とも斜面に直交する方向であり、区画溝と判断するほどの深さ、形状とは認めがたいことから、排水溝のような性格を考えておきたい。また、トレンチ北壁付近では、トレンチ外側へ向かって落ち込む状況が確認された。畑地を区画する溝の可能性がある。出土遺物はなく、時期は不明である。



第11図 5トレンチ平面図・断面図

## 第8節 6トレンチの調査

### 概要

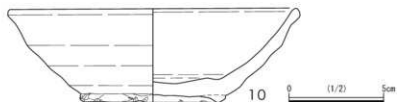
5トレンチの南側に設定した2m×10mのトレンチである。調査面積は21.56㎡である。現況は5トレンチと同区画の畑地内であり、南北に平坦で、東へ傾斜する緩斜面である。

調査の結果、表土は30～40cm程の厚さがあり、現在の耕作土であるが、地山由来の褐色土をかなり含む状況であった。畑地として整地した際に、客土として盛土されたものとみられる。表土下には旧表土とみられる褐色土が部分的に残存しており、少量ではあるが、山茶碗の小片を中心とした中世遺物が出土する。トレンチ南側では遺構を確認している。

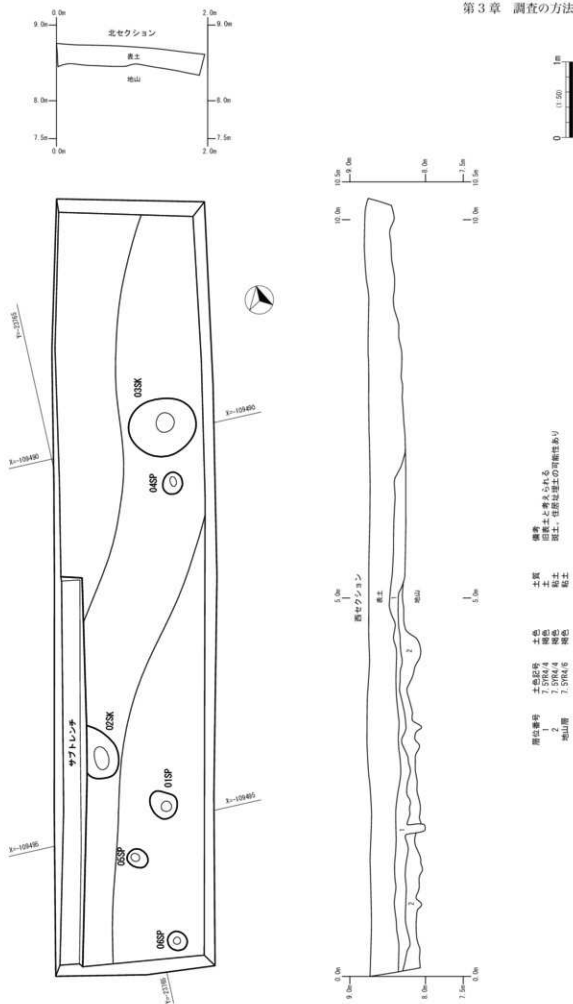
### 遺構・遺物

トレンチ南側は旧表土が残存しており、後世の整地にとまなう攪乱が及んでいないようであった。遺構は主にトレンチ南側で確認された。柱穴の可能性のあるビット3基を確認している。並びが不規則であるため、検出範囲内では建物遺構とは判断できない。ただし、周辺から焼土ブロックや炭化物が出土していることから、住居址などの建物遺構の一部である可能性がある。

第12図-10は山茶碗である。尾張編年の第5型式にあたる。トレンチ南側のビット群付近から出土している。



第12図 6トレンチ出土遺物



第13図 6トレンチ平面図・断面図

層位番号  
1  
2  
地山層

土色記号  
2  
7.5YR4.4  
7.5YR4.6

土色  
褐色  
暗褐色

土質  
粘土  
粘土  
粘土

備考  
黄土層と見られる  
黄土、低層部では可能性あり

## 第9節 7トレンチの調査

## 概要

6トレンチの南側に設定した2m×10mのトレンチである。調査面積は21.93㎡を測る。7トレンチは今回の調査において最も南端に位置するトレンチであり、遺跡の南側への広がりを確認する目的で設定した。現況は6・5トレンチとは別区画の畑地にあたり、6トレンチとの間には、コンクリート製のU字溝が東西方向に存在する。地形的には6・5トレンチと同様、南北にほぼ平坦で、東へ傾斜する緩斜面である。

調査の結果、6トレンチと同様に、表土は地山由来の客土を含む耕作土であった。厚さは30cm程であり、畑地として整地された際に盛土されたものと考えられる。表土（盛土）下は旧表土とみられる褐色土が残存している。6トレンチとは異なり、残存状況は比較的良好であり、20cm程の厚さで堆積していた。遺構はトレンチ全域から確認している。

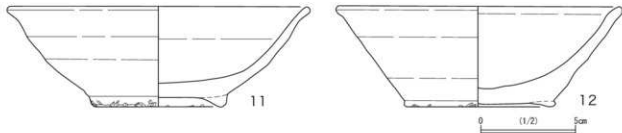
## 遺構・遺物

トレンチの中央付近で東西方向に延びる溝状遺構を確認した。幅は50cm程で、地山面からの深さは約10cmである。断面はU字状を呈する。出土遺物に乏しく、遺構の時期は不明であるが、現在の地割とは無関係な位置にあることから、近世以前の可能性が高い。

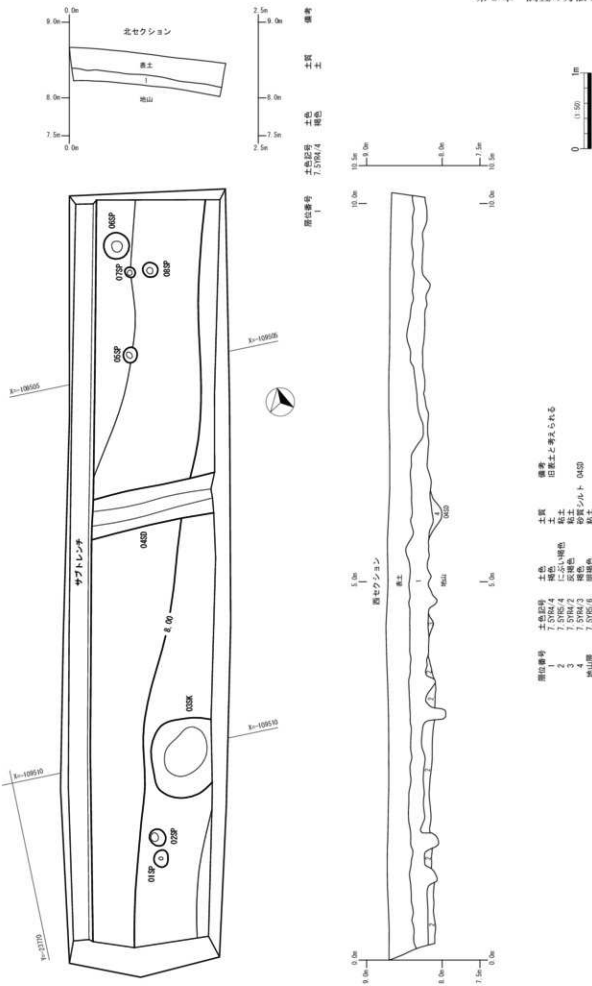
この他、複数のピットや土坑を確認しているが、いずれも出土遺物がほぼなく、遺構の性格は不明である。

図化した出土遺物としては以下のものがある。第14図-11は山茶碗である。尾張編年の第5型式にあたるが、やや古い様相を持つことから、第5型式前半に位置づけられる。

なお、調査中に7トレンチのさらに南側に位置する旧喫茶店付近から表採した資料についても、ほぼ完形品であることから掲載しておく。第14図-12がそれで、同じく山茶碗である。口縁のごく一部が欠けるものの、前述のとおりほぼ完形品で、内面が著しく磨耗している。尾張編年の第6型式に位置づけられる。



第14図 7トレンチ出土遺物



第15図 7トレンチ平面図・断面図

掘削番号	土色記号	土色	土質	備考
1	7.5YR4.4	褐色	粘土	掘削 旧掘土と考えられる
2	7.5YR5.4	二色い褐色	粘土	
3	7.5YR4.7	褐色	粘質シルト	
4	7.5YR4.3	暗褐色	粘土	
地山層	7.5YR5.6	暗褐色	粘土	

## 第10節 8トレンチの調査

### 概要

8トレンチは、4トレンチの西側に設定した2m×11mのトレンチである。調査面積は22.02㎡である。遺跡の西方向への広がりを確認する目的で設定したトレンチであり、4トレンチに直交する東西方向に延びるトレンチである。

現況は果樹が植えられた畑地であり、4トレンチの位置する畑地とは段で区切られた別の区画である。現況地盤における4トレンチとの比高差は8トレンチ東端で50cm程である。また、1～7トレンチの位置する畑地と同様の東斜面ではあるが、傾斜がやや急であり、トレンチ東西端での比高差は1.5m程ある。トレンチ東端はさらに傾斜が急になり、4トレンチとの間の段差へとつながっていく。

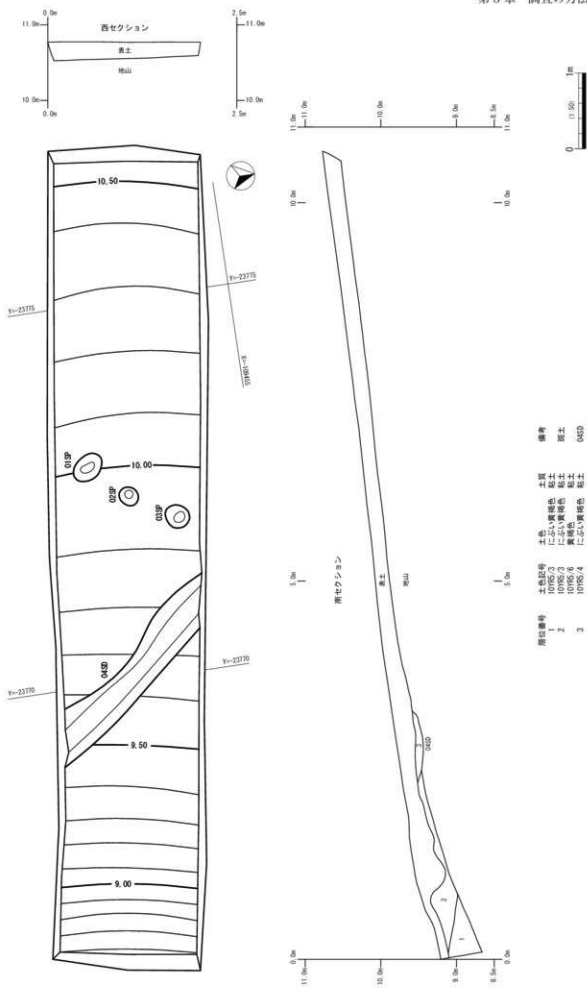
調査の結果、表土は薄く20cm程度であった。表土下はすぐに地山が現われ、トレンチ東側約3mの範囲は地山が落ち込んでおり、トレンチ東端では、現地表下50cmで地山を検出した。堆積状況から、地山が人為的に崩り込まれており、現在の地形の段差とも整合することから、整地痕跡とみられる。なお、トレンチ西側では地山に礫が含まれるようになる。

### 遺構・遺物

トレンチ東側の整地跡の落ち込み付近で、トレンチ内を斜めに横断する南北方向の溝状遺構を確認した。また、トレンチ中央付近に3基のビットを並んで検出した。掘立柱建物の柱穴としては間隔が短いことから、住居址等ではないとみられる。遺構の時期については判断できるほどの遺物が出土していないことから断言はできないが、中世以降であろう。

出土遺物については図化する遺物は出土していない。全て中世遺物であった。





第16図 8トレンチ平面図・断面図

## 第11節 9トレンチの調査

## 概要

9トレンチは、8トレンチの西側に設定した2m×11.5mのトレンチである。調査面積は24.8㎡である。調査前の地形観察では傾斜が緩やかな平坦面が広がっていたことから、当初計画よりも長さを延長して設定した。

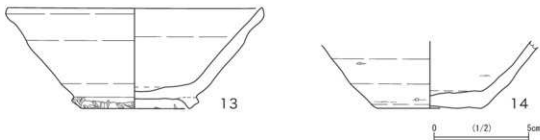
現況は8トレンチ同様に果樹が植えられた畑地であり、東へ向かって傾斜する緩斜面である。前述のとおり本トレンチ周辺は傾斜が緩やかであり、南北方向に同様の地形が広がっている。

調査の結果、8トレンチと同様に表土は薄く20cm程であった。遺物包含層は残存していないか、流出しているものと考えられ、表土直下で地山を検出した。地山面からは多くの遺構を確認しており、その多くは柱穴状のピットであった。中でもトレンチほぼ中央では東西方向に並ぶ柱穴を確認しており、掘立柱建物である可能性が高い。

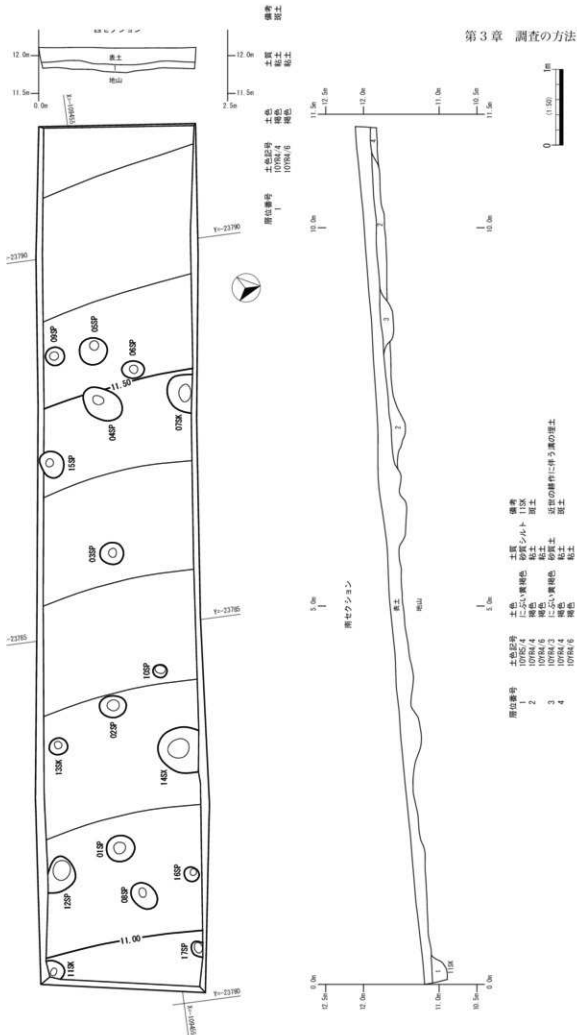
## 遺物・遺構

トレンチほぼ中央から東端にかけて確認した01SP、02SP、03SP、04SPは等間隔に並ぶことから、掘立柱建物の一部である可能性が高い。トレンチの北側ないし南側にさらに広がっているとみられる。この他にも柱穴の可能性の高いピットを複数確認しており、本トレンチ周辺は建物跡が一定期間存在していたとみられる。

出土遺物としては、主に柱穴埋土から中世遺物が出土している。図化に耐える破片はほとんどないが、図化した遺物としては第17図-13、14がある。いずれも山茶碗であり、13は尾張編年の第6型式、14は同第8型式に位置づけられる。14については01SPから出土しており、遺構の時期を示唆する遺物である。図化できない遺物としては、常滑系の甕、片口が出土している。



第17図 9トレンチ出土遺物



第18図 9トレンチ平面図・断面図

## 第12節 10トレンチの調査

### 概要

10トレンチは、9トレンチの西側に設定した2m×10mのトレンチである。調査面積は21.06㎡である。本トレンチは今回の調査において最も西側に位置するトレンチであり、北広遺跡のほぼ西端にあたる位置であることから、遺跡の西端の状況を確認することを目的として設定した。

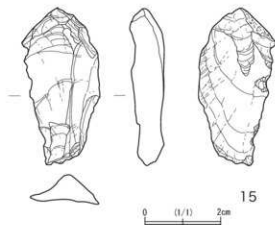
現況は8、9トレンチと同様に果樹が植えられた畑地であり、北広遺跡が位置する東斜面の最頂部に近く、傾斜は緩やかである。

調査の結果、表土は8、9トレンチ同様に浅く、15cm程であった。遺物包含層はほぼ残存しておらず、わずかにトレンチ東半に部分的にみられた程度である。やはり斜面であることから、堆積するよりも斜面下側へ流出しているものと考えられる。トレンチ全域から遺構を確認しているが、全て土坑であり、柱穴を数多く確認した9トレンチとは様相を異にする。

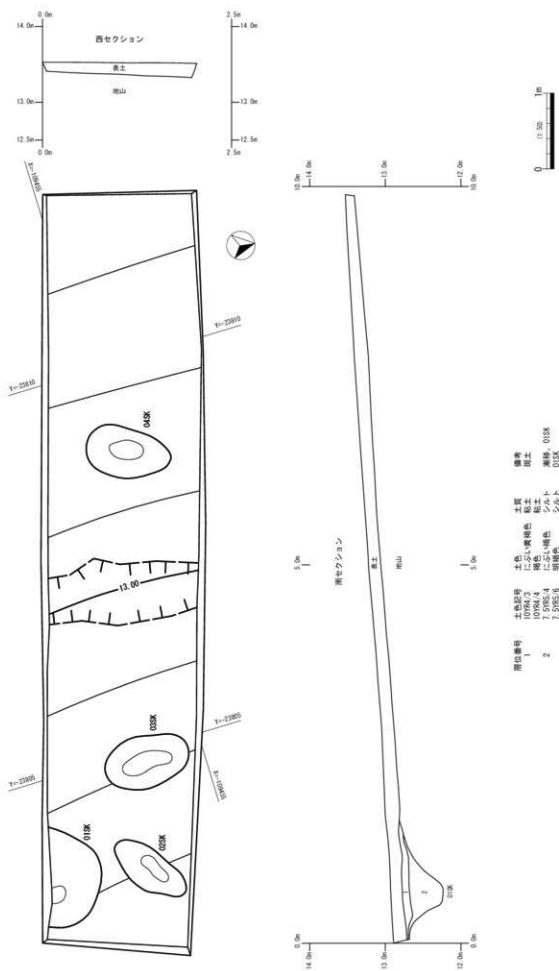
### 遺物・遺構

前述のとおり、トレンチ全域から遺構を確認しているが、全て土坑である。OISKについては遺物を伴うが、これ以外の土坑は無遺物であった。OISKはトレンチ東端、南壁寄りで確認した。半分は調査区外に広がっており、壁際での直径は約1.3m、すり鉢状の断面形状を呈し、深さ50cmを測る。遺構埋土からチャートとみられる剥片が1点出土した(第19図-15)。他に出土遺物もなく、また剥片であることから所属時期は不明である。

この他、図化し得なかったが、トレンチ東半から山茶碗などの中世遺物が少量出土している。



第19図 10トレンチ出土遺物



第20図 I0トレンチ平面図・断面図

## 第4章 総括

### 第1節 北広遺跡の範囲について

本節では、各トレンチの調査で判明したそれぞれの地点での遺跡の残存状況から、現時点における北広遺跡の範囲について考察する。

まず、遺構・遺物については、3トレンチ以外の全ての地点で確認した。残存状態については各地点でかなりの差異があり、遺物出土量についても同様である。このことは、北広遺跡の範囲が今回の調査地点全域を包摂していることを示唆している。周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡分布図上に示されている北広遺跡の範囲は、東西およそ80m、南北およそ110mの範囲となっており、今回の調査範囲では10トレンチのみが範囲外にあたる。今回の調査では、この周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲が、実際の遺跡の範囲にほぼ近いことを確認することができた。ただし、表採資料として図示した第14図-12の山茶碗は、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲よりも更に南側にあたる。7トレンチ南側の道路は明治期の地形図には存在していないことから、一連の斜面であったとみられる。北広遺跡の範囲がより南側に延びる可能性も考えられる。

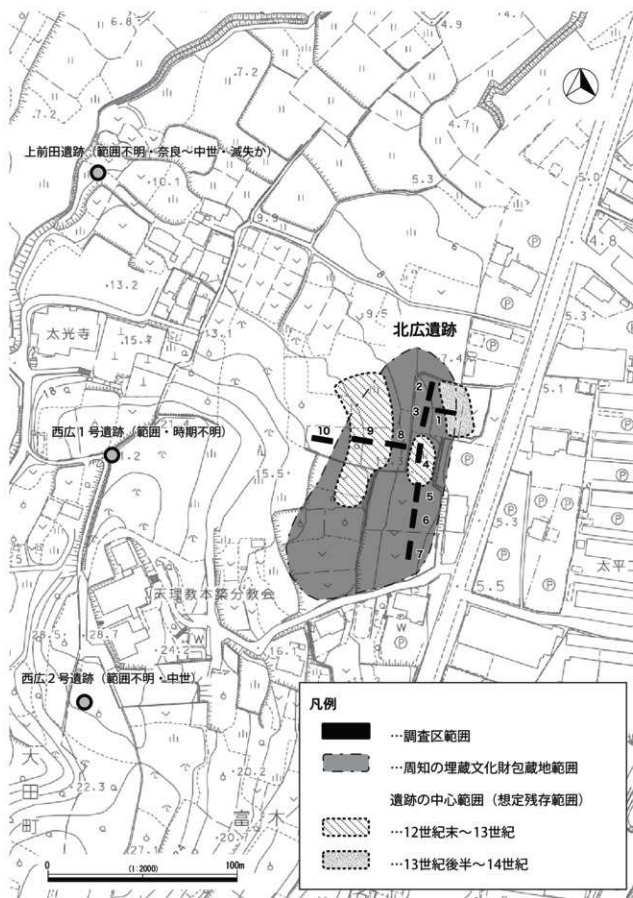
前述のとおり遺構、遺物の残存状態が各地点でかなりの差異があることは第3章の各節で報告したとおりである。ここで遺構、遺物の残存状態から、遺跡の中心と推定される範囲について検討しておくたい。

まず、1トレンチでは、東側で12世紀末から13世紀初めにかけての遺物や柱穴を確認している。周辺には同時期の遺構、遺物が存在している可能性が高い。また、2、3トレンチ周辺は後世の削平が及んでいるが、1トレンチ周辺はこれを免れているようである。1トレンチのさらに東側10mでは段がついており、旧地形が失われているが、1トレンチを中心とした南北の範囲は残存状況が良好であるとみられる。

次に4トレンチでは13世紀末から14世紀初頭にかけての住居址の可能性のある遺構を確認しており、遺物量も比較的多い。遺物包含層は削平されている可能性があるものの、周辺にも遺構が広がっているとみられる。旧地形の残存状況から、この遺構の広がりは4トレンチを中心として南側へは広がる可能性はあるものの、北側は削平を受けている可能性が極めて高い。

9トレンチは今回の調査で最も成果があった地点である。掘立柱建物を確認しており、この他にも13世紀代後半の遺物や多くの遺構を確認していることから、周辺には同様に遺構が存在している可能性が高い。注意して現況地形を観察すると、9トレンチの報告で述べたように、周辺は傾斜が緩やかになっており、平坦面を形成している。そしてその平坦面は南北方向に広がっている状況が看取できる。この平坦面上に9トレンチで確認した13世紀代後半を中心とする遺構が展開していると考えられる。

以上を踏まえて、北広遺跡の範囲及び現在残存している遺跡の中心範囲を想定し、現況図上に示したものが第21図である。



第21図 北広遺跡想定範囲 (S=1/2000)

## 第2節 まとめ

今回の調査では、北広遺跡の範囲及び遺跡の残存状況の確認を目的として10箇所のトレンチを設定して調査を行った。調査の結果、前節で述べたとおり北広遺跡の範囲は、現況の遺跡分布地図上の範囲とほぼ同一であること、遺跡の残存状況は部分的に残る状況であるが、9トレンチ周辺では一定の範囲で遺構が広がっている可能性が高いことが明らかとなった。本節ではまとめとして、周辺の遺跡との関連性や、遺跡の形成過程について、調査成果を踏まえて推察する。

今回の調査では12世紀後半から15世紀にかけての時期の遺物のみが出土している。このことは遺跡の存続時期を考える上で重要な手がかりとなる。すなわち12世紀後半以前には北広遺跡はほとんど土地利用がなされていないものと考えられる。また、15世紀以降は遺物が残るような利用、すなわち居住をとまなうような土地利用はされていなかったと考えて良いと思われる。近代以降は畑地として利用されていることが明治期の地形図から分かっており、近世においても同様の利用のされ方であったのであろう。

さて、北広遺跡の存続時期である12世紀後半から15世紀にかけては、北広遺跡が所在する木田の丘陵全域で多くの遺跡が確認される時期でもある。その中心と言える遺跡が木田城跡である。木田城跡は、『愛知県中世城館調査報告Ⅳ』（1998：愛知県教育委員会）によると、遺構の一部が残存しているとされ、時期は弘治年間から天正年間とされている。縄張り図によると、曲輪部分とされる箇所は住宅地となっており、周辺に堀がめぐる。この状況は現地形でも確認することができる。ただし、周辺を踏査すると、他にも扇状の地形が何箇所か確認できる。また、報告書が言及する時期については、文献で確認できる時期が、上記の弘治年間から天正年間（1555～1593）ということであり、木田城跡の存続時期をそのまま示すものではないと考えられる。城主であったとされる荒尾氏は、鎌倉時代には既に有力な武士として古文書にその名が残っており、木田城跡の成立が遡る蓋然性は高い。木田の丘陵は、西側の海岸平地を臨み、大田川が海岸平地に向かって流れを変える交通上の要衝であったと考えられ、この場所を支配することは荒尾氏にとって戦略上重要であったと考えられる。

荒尾氏の存在が確認される鎌倉時代は、奇しくも北広遺跡の成立時期と符合する。木田城の成立時期が不明である以上推論の域を脱しないが、北広遺跡を含む木田の丘陵全体の中世遺跡は、木田城の一部か、関連する遺跡である可能性が高いと考えられる。今回の調査においても、一般的な集落遺跡から出土する銅や甕などの煮炊きに関わる器種が出土していないこともこれを裏付ける。

中世における城跡では、平時は居住していないことが普通であり、遺物量も少ないことが多い。北広遺跡の遺物量が少ないこともこうした事情を反映している可能性が考えられる。

今後、北広遺跡において調査を実施する際には、中世城館である木田城に関連する可能性も考慮に入れた上で調査を進めていく必要がある。

## 《参考文献》

- 『概説 中世の土器・陶磁器』1995 中世土器研究会編 真陽社
- 『東海市史 通史編』1990 東海市
- 『愛知県中世城館調査報告Ⅳ（知多地区）』1998 愛知県教育委員会
- 『愛知県知多半島遺跡詳細分布調査報告書』1999 愛知県教育委員会
- 『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』2012 愛知県
- 『愛知県東海市 畑間・東畑・郷中遺跡発掘調査報告—平成11～19年度調査』2014 東海市教育委員会



## 写真図版

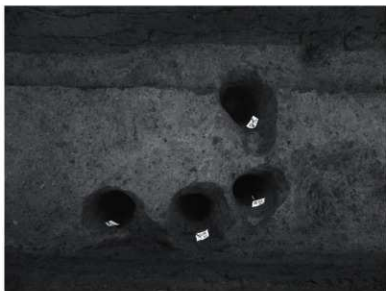




調査地遠景（西から）



1トレンチ全景



1トレンチ柱穴・土坑

写真図版第 2



1 トレンチ遺物出土状況



2 トレンチ全景



2 トレンチ 01SK



3トレンチ全景



4トレンチ全景



5トレンチ全景

写真図版第 4



5 トレンチ 02SD・03SD



6 トレンチ全景



7 トレンチ全景



7 トレンチ 06SP・07SP・08SP



8 トレンチ全景



8 トレンチ 04SD



8 トレンチ落ち込み



9 トレンチ全景



9 トレンチ 04SP・05SP・06SP・07SK





9トレンチ柱穴列



10トレンチ全景



10トレンチ 01SK・02SK・03SK



1 トレンチ出土遺物 1



1 トレンチ出土遺物 2



1 トレンチ出土遺物 3



1トレンチ出土遺物 4



4トレンチ出土遺物 5



4トレンチ出土遺物 6



4トレンチ出土遺物 7



4トレンチ出土遺物 8



4トレンチ出土遺物 9



6トレンチ出土遺物 10



7トレンチ出土遺物 11



表採資料 12



9トレンチ出土遺物 13



9トレンチ出土遺物 14



10トレンチ出土遺物 15

## 報告書抄録

ふりがな	きたひろいせきはんいかくにんちょうさほうこく							
書名	北広遺跡範囲確認調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	宮澤浩司							
編集機関	国際文化財株式会社 中部支店							
所在地	〒452-0901 愛知県清須市阿原神門95-1 Tel 052-408-0245							
発行機関	愛知県東海市教育委員会							
所在地	〒476-8601 愛知県東海市中央町一丁目1番地 Tel 052-603-2211							
発行年月日	2016年（平成28年）3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° / ′ ″	° / ′ ″			
キタヒロイセキ 北広遺跡	アノサカン トウカイシ フキヤママ 愛知県東海市富木島町	23222	43060	35 0 13	136 90 62	20150911～20151021	210㎡	範囲確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
北広遺跡	遺物散布地	中世		住居跡		常滑（知多）窯産 陶器	中世掘立柱建物跡	

---

愛知県東海市  
北広遺跡範囲確認調査報告

平成 28 年 3 月 10 日印刷

平成 28 年 3 月 31 日発行

- 編 集 国際文化財株式会社 中部支店  
〒452-0901 愛知県清須市阿原神門 95-1  
TEL 052-408-0245
- 発 行 愛知県東海市教育委員会  
〒476-8601 愛知県東海市中央町一丁目 1 番地  
TEL 052-603-2211・0562-33-1111 (代表)
- 印刷・製本 株式会社 クイックス  
〒448-0022 愛知県刈谷市一色町 2-10-6  
TEL 0566-26-0179
-